

保育園生活の中で

濱口敦子



私的なことではありますが、私は今生まれて初めて妊婦生活を送っており、産休を目前にしてこの原稿に向かっています。妊娠八か月ともなると、おなかの赤ちゃんもかなり活発になり、まだ千四百グラム程度の小さな身体を懸命に動かしてポコポコとおなかを蹴ってくる毎日です。保育中におなかが大きく動いたときに、そのことを子どもたちに伝えるところ、担当している二歳児の子どもたちが顔全体をお日様のように輝かせて、

「赤ちゃん動いたの？」

と言いながら、優しくおなかをなでてくれました。

そして、その時本当におなかが動いた瞬間に出合えた子どもたちは、息をのむように感動し、その日以来毎日のように、

「赤ちゃん動いてる？」

「赤ちゃんもう出てきた？」

「赤ちゃんの名前、もう決まった？」

「○○ちゃんのおなかの中にも、赤ちゃんいるんだよ」

と、次から次に、うれしい質問やユニークな発想を聞かせてくれるようになりました。そして、おなかが大きくなり、動きがゆつくりになっていく私をい

たわって、

「これ持ってあげる」

「布たたむの手伝ってあげる」

と、手伝いを申し出てくれたり、

「ここは滑るからゆっくり歩いてね」

などと、大人のしぐさや口調をまねして危険がないように伝えてくれることもありました。私はそのよ
うな言葉を聞かされたたびに、生命の誕生を楽しみにして
くれる小さなお兄ちゃんやお姉ちゃんたちの優しさ
を感じ、熱い思いがこみ上げました。そして、新し
い生命を迎え入れる子どもたちの「愛」は、一人の
保育者としてもこの上なくうれしく、初めて母親に
なるうとして一人の女性としても大きな励みとな
りました。素敵なサポーターに応援されながら妊
婦生活を送れたことは、きっとこれから迎える出産
時の力強い支えとなることでしょう。

このような愛をいっぱい受けている当の赤ちゃん
ですが、力強くおなかを蹴って元気にしている一方
では、まだまだ十分に安全な環境の中で守られなけ
ればならない存在でもあります。私が仕事で疲れて
いるときには赤ちゃんにもそのことが伝わるよう
で、夕方になると、よくおなかを張って、休息を必
要とすることがあります。羊水に守られながらも居
心地の良さや悪さを敏感に感じて、

「お母さん、もう少しゆったり過ごして！」

とサインを送ってくるのでしよう。このことから、
まだ本能的な反応ではありながらも、もうすでに快
や不快を身につけていく「危ないを知る」「危なく
ないを知る」力へとつながっていくのかもしれないま
せん。

さて、ようやく本題の「危ないを知る」に入りた

いと思います。

保育園での生活、その中でもとりわけ乳児クラスといわれる〇歳児から二歳児までのクラスにおける生活は、安全な環境の中で営まれることが、保育を行う上での基本的な条件になっています。安全な環境が整えられ、その状態が保たれているからこそ、遊びや食事、睡眠といった日常生活が安心して送れるからです。そのような点から見ると、人として誕生した後もまだしばらくは、お母さんの羊水の中とまではいかずとも、居心地のよい環境が保障されなければならぬ対象だということになります。

それでも、もう外界に飛び出してきたのですから、全てがふわふわの綿に包まれたような生活というわけにはいきませんので、私たち保育者は、成長に応じた伝え方で子どもたちが自ら危ないことをキヤッチできる感覚を育てていかなければなりません。

ん。その感覚の育ちを促す配慮は後でお伝えすることにし、まずは私が勤めている保育園で取り組んでいる安全な環境づくりについて触れてみます。

私の保育園では、子どもたちが安全な環境の中で安心して生活できるように、危険防止のためのチェックリストが作成されています。その内容は、看護師を中心に各クラスで検討され、成長や発達に応じた視点から考えられています。もちろん、この取り組みはチェックしただけで満足するのではなく、日ごろから保育者の気配りするべきポイントを文章化することで、経験豊富な保育者から経験の浅い保育者までが共通の認識の下に、子どもの安全を守りながらより丁寧な保育を展開していくことが目的になっています。

その一例として、私が担当している二歳児のクラスでのチェックリスト五十項目の中からいくつかを

ピックアップしてみます。

(1) 基本的なハード面

・室内、室外で角や鋭い部分にはガードをしてある。

・ロッカーや棚は、倒れないように固定されている。

(2) 保育者が把握しておくべき点

・子どもの遊んでいる位置を確認している。

・常に子どもの人数を把握している。

・ドアを開閉するときは、子どもの手や足の位置を確認している。

・子どもが大きな物を持つときは、見守りながら段差や地面の状態を把握している。

(3) 子どもの発達段階を考慮しての配慮

・午睡後、十分に覚醒してから活動に移っている。

・おのおの子どもが、自分の足に合ったサイズの靴を履いている。

・食べ物の固さや大きさ、一口量はその子に合ったものである。

以上のように、本当に基本的な内容ではありませんが、これらの基本的事項を共通の認識の中でクリアしていることが、より質の高い保育を見通していく助けになるのです。(1)のハード面は、日常保育の危険防止にとどまらず、災害時の被害防止にもつながり、(2)の保育者側の配慮についても、日ごろから意識的に行うことで、保育者自身に全体の把握をする力が身につくとき、いつもと違う状況が生まれたときにもすぐに気がつける目や感性が養われていくようになります。そして、特に(3)の子どもの発達段階を考慮しての配慮という視点は、保育の内容にも直接かわってくる重要な内容で、年齢ごとに一番差が出て

くる内容になります。

たとえば、「午睡後、十分覚醒してから活動に移っている」というのも、まだ歩行が安定していない子どもを十分な覚醒を待たずに起こしてしまうと、排泄や着脱行為に対して能動的になり難い上に、不必要な転倒を引き起こしてしまう可能性があります。また、「食べ物の固さや大きさ、一口量はその子に合ったものである」というのも、大人の介助を離れてほぼ自分で食べられるようになった二歳児くらいの子には、注意して見ていく必要がある点です。大人の援助なしでも適量を口に運び、しっかりと飲んで食べられるかなど、食事における自立は、同時に食事中に起こり得る事故を防ぐことにもつながるのです。

このように、危険防止に対する大人の意識を深めていく中で、保育環境の安全対策が確立し、さらに

保育者の保育や子どもに対する注意力や認識力を高め、それが子どもにとって「育ちに合った環境の中で、のびのびと生活できる」ものとなるのです。

では最後に、先に触れた「子どもたちが自ら危ないことをキャッチできる感覚を育てていく」という点については、どのような配慮がなされているのか紹介したいと思います。

私の保育園では、〇歳児の離乳食の時点から、食事に使われる食器は全て陶器を使用しています。子どもが扱うと割れる心配があるからといってプラスチックの食器を用意するのではなく、あえて本物の素材を使用することで、丁寧に作られた家庭的な食事を、そのままの温かさや愛情を保たせながら子どもたちの前に出すことが可能であり、そのことは毎回の食事を大切にいただく心を育てることにもなります。そして、ゆつたりとした心地で食事に向か

えることで、食器の扱いも自然と丁寧になり、子どもであつても食器を割るようなことはほとんど見受けられないという状況になるのです。

もちろん、子どもが丁寧に食器を取り扱えるようになるためには、離乳食の移行期以降も、子どもの自食行為がある程度身につくまで保育者と子どもとが一对一で食事を食べるようにし、その間に栄養以上の愛情も込めながら丁寧なかかわりをする事が前提にあることは言及しておかなければなりません。保育者と子どもとの間に培われた食事上の信頼関係は、表面的なマナーにとどまることなく、心から食事を楽しみ、料理や食器を大切にすることも自然とわかせてくれるのでしょう。

つまり、陶器を使う目的は「陶器は割れると危ない。丁寧に扱おう」ということを知らせるためではなく、むしろ「割れる素材ではあるけれど、丁寧に

扱えば、よりおいしい食事を楽しむことができる」「食事室の人が丁寧に作ってくれたご飯を温かいまま食べられる食器を使えてうれしい」という発想から、正しい扱い方を伝えていくことにあるのです。

以上の実践を通して私が感じていることは、子どもが「危ないを知る」前提には「危なくないを知る」ことが必要なのではないかということです。危ない環境をキヤッチする感覚というのは、安全な環境に身をおいて、その中で安心して過ごすときに育つプラスの感覚なしにしては正しく作用しないのではないかと思うのです。そういう点から考えても、私たち保育者は、子どもに日々の保育の中で本物のよさを伝え、さまざまな本物の体験を提起し、子どもたちが五感を豊かに発揮して、研ぎ澄まされた感覚や美しい感性を養う手伝いをしていく貴重な役割であるといえるでしょう。(かしのき保育園)